

看護研究平成7年度のまとめ

今年度のテーマ 「看護が科学的に実証される」

今年度の企画・運営

1. 講義 「看護の場面での気づきを研究につなげるには」 医療短大 藤原先生
1995. 5 .17. 17:30～19:00 出席者 72名
2. 講義 「こうすれば良くなる看護研究」 医療短大 楊箸先生
1995. 6 . 2. 17:30～19:00 出席者 40名
3. 看護研究相談日 医療短大 藤原先生・楊箸先生
1995. 7 .14. 14:00～17:00 出席者 12部署13題 20名
4. 講義 「看護研究の進め方」 医療短大 藤原先生
1995. 9 .24. 17:30～19:00 出席者 25名

平成7年院内看護研究発表会 1995.12. 2. 9:30～13:30

演題数25題 出席者 90名

進 行 西澤・草深・松本

受 付 吉澤・桐田

スライド 佐藤・田伏

座 長 佐川・青柳・鰐川・小穴・中川・山口・佐藤・樋口
大曾・竹本・小野・藤原・新倉・宇治・細田・市川

研究発表の講評 医療短大 楊箸先生

- ・方法の記述が曖昧で、何を指標にしているのかわからない発表がいくつかあった。
- ・考察が、今回の研究から得られた結果の考察でなく、研究しなくても言えるような一般的なものとなっている。
- ・考察は自分たちの行った結果から一つか二つ明らかにされたことをいえば良い。一つの研究で多くのことは明らかにすることはできない。
- ・結果はできるだけ数値化・視覚化する方法（グラフ・図表）で表現してほしい。
- ・結果を示す時には、比較対象を設ける。何かと比べないと、良いのか悪いのか、大きいのか小さいのかわかりにくい。比較対象がはっきりしていると論理的にわかりやすい。
- ・現状把握に終始している。単発的に出ては消える研究では、病院の発展とはならない。3年単位・5年単位で系統的に病棟で取り組むことのできる方針を立てる必要がある。

- ①調査研究等による現状把握（初年度は文献検索だけでも良い）→②実験的検討→③臨床応用
- ・ 1回だけで成果の上がる研究は少ない。地道な研究が必要。色々な角度（フィールドワーク・統計的手法を用いるなど）から研究してみること。
 - ・ 病棟単独でなく他部署との連携で、研究がより連携によって深まっていくこともある。

教育委員会 看護研究担当 西澤・草深・松本